第七百回の点呼 ── 最も繰り返した装置が、五本に一本は働いていない

── 論文699 までの 698 編のうち 544 編（0.779370）が「分離子」を持ち、最初は論文23、301 以降は四つの帯すべてで 1.000000 になった ── 分離子は、装置が判定になっているか、言い直しになっているか ── [論文700]

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)
Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan｜山岸勇輝ラボ
2026年9月

From thinking to syncing.

要旨

論文600 は、判定語「同根」を数え、その多くが判定になっていないことを記録した。本稿は同じ検査を、体系が最も繰り返してきた装置「分離子」に当てる。新しい定理も法則も主張しない。 第一に、分離子は、途中から作法になった――論文699 までの 698 編のうち 544 編（0.779370）が持ち、最初は論文23 である（第2節）。 第二に、定着は段になっている――1〜100 で 0.050505、101〜200 で 0.410000、201〜300 で 0.990000、301 以降は四つの帯すべてで 1.000000 である（第2節）。 第三に、中身は一度も繰り返していない――決まった型で取り出せた 188 本の文はすべて相異なり、重複は 0 本である（第2節）。 第四に、これが本稿の芯である。五本に一本は、題名に在る語だけでできている――分離子の語のうち題名にも在る割合は平均 0.283871 で、32 編（0.206452）は重なりが 1.0 である（第3節）。 第五に、その 32 編を読むと、ほとんどが言い直しだった――28 編（0.875000）は題名の主張に「かどうか」を付けただけで、何かを足しているのは 4 編である（第3節）。 第六に、足していた 4 編には、共通の形があった――3 編（334・346・593）は「どちら側に無いか」を名指しており、これは体系で 10 本（0.053191）しか使われていない最も少ない形である（第4節）。 キーワード：点呼、分離子、自己検査、装置の摩耗、題名との重なり、体系の計量。

本稿の射程（射程注記）：新しい定理も法則も主張しない——数えているのは体系自身の記述であり、外の世界について何も主張しない。英語版を数えない——日本語版の .tex だけを見た。英語版の対応する表現は数えていない。取り出しの限りを明示する——「分離子は、〜」という決まった型からしか文を取り出していないので、188 本は「分離子」を含む 544 編の一部である。残りは別の言い回しで書かれている。判定を機械にさせない——「言い直しかどうか」は 32 編すべてを読んで決めた。機械は候補を出しただけである。既刊を直さない——該当した編を改訂することは提案しない。以後の書き方の規約としてだけ述べる。時点を固定する——走査は論文699 までで固定した。編が増えれば数は動く。既刊との関係：論文600 は、判定語「同根」を数え、501〜599 で同根と答えた 39 編のうち 30 編（0.769231）が一つの式の二つの帰結を同根と呼んでいた——作り方から別根になりえず、判定になっていない——ことを示した。論文300 は、同根か別根かは判定できると書き、数値の一致だけで同根としていないかを検査すべきだと書き残した——本稿は同じ手つきを、判定語ではなく装置に当てる。語の意味ではなく、装置が情報を足しているかを見る。加えたのは、分離子の採用の推移を帯ごとに数えたこと、取り出せた文に重複が無いことを示したこと、題名との語の重なりという尺度を置いたこと、重なり 1.0 の 32 編を読んで 28 編を言い直しと判定したこと、足していた 4 編の共通の形を名指したことである。

1. 記法と問い

設定：論文699 までの日本語版の .tex を読み、「分離子」という語を含む編を数える。さらに「分離子は、〜」という決まった型から文を取り出し、その文に出てくる漢字の連なりが、同じ編の題名にも出ているかを見る。

$$r_n = \frac{|W(\text{分離子}_n) \cap W(\text{題名}_n)|}{|W(\text{分離子}_n)|}$$

W は漢字の連なりの集合である。$r_n = 1$ なら、その分離子は題名に在る語だけでできている。

問い：分離子は、判定になっているのか、言い直しになっているのか。

2. 採用の推移と、文の相異

計算 2.1：走査対象は 698 編（番号 1〜699）。「分離子」を含むのは 544 編（0.779370）で、最初は論文23 である。帯ごとの割合は次のとおり。

帯	持つ編	割合
1〜100	5 / 99	0.050505
101〜200	41 / 100	0.410000
201〜300	99 / 100	0.990000
301〜400	100 / 100	1.000000
401〜500	100 / 100	1.000000
501〜600	100 / 100	1.000000
601〜699	99 / 99	1.000000

> **観察 2.2**
>
> 定着は 201〜300 の帯で起きた。0.410000 から 0.990000 へ一つの帯で跳び、以後は四つの帯すべてで 1.000000 である——装置が作法になった時点は、はっきり特定できる。

計算 2.3：決まった型から取り出せた分離子の文は 188 本で、相異なる文も 188 本、重複は 0 本である。

> **観察 2.4**
>
> 重複が無いのは、当たり前でもある。主題が違えば語も違うので、文が一致しないこと自体は驚くに当たらない——だから「全部違う」は、装置が働いている証拠にはならない。中身を別の尺度で見る必要がある。

> **観察 2.5**
>
> 形は四つに分かれた。選択（A か B か）が 51 本、有無（〜かどうか）が 53 本、帰属の否定（〜の側には無い）が 10 本（0.053191）、その他が 74 本である——選択と有無がほぼ同数で並び、帰属の否定が最も少ない。

3. 五本に一本は、題名に在る語だけでできている

計算 3.1：分離子の語のうち題名にも在る割合は、平均 0.283871（155 編）である。重なりが 0 の編は 100 編（0.645161）、重なりが 1.0 の編は 32 編（0.206452）である。

> **観察 3.2**
>
> これが本稿の芯である。重なり 1.0 は、題名に無い語を一つも使っていないということである。五本に一本がそうなっている——その分離子は、題名が既に言ったことを、別の語では言い直していない。

計算 3.3：その 32 編（334・346・527・531・532・535・536・539・558・580・591・592・593・609・619・626・630・632・634・639・640・641・642・644・646・651・662・663・666・684・692・697）をすべて読んだ。28 編（0.875000）は題名の主張に「かどうか」を付けた形で、新しい区別を足していない。足しているのは 4 編（334・346・593・640）である。

> **観察 3.4**
>
> 言い直しは、誤りではない。だが働いてもいない。題名が「X である」と言い、分離子が「X かどうか」と言うとき、読者は同じことを二度読んでいる——分離子が答えるべきは「何を動かすと別物になるか」であって、題名の再確認ではない。

> **観察 3.5**
>
> これは論文600 が見つけたものと同じ型である。600 は、判定語「同根」が判定になっていない編を 0.769231 と数えた——そこでは語の意味が薄まっていた。ここでは装置の情報量が薄まっている。繰り返すほど、繰り返しそのものが目的になる。

4. 足していた四編と、以後の規約

観察 4.1

足していた 4 編には、共通の形があった。3 編（334「センサの精度の側にはない」・346「物質の側にはない」・593「縦と横の摩擦を足し算で考えるか、向きを持つ量として考えるか」）は、効いていない側を名指している——題名が「何が効くか」を言ったあとで、分離子が「何が効かないか」を言えば、それは新しい。

観察 4.2

その形は、最も使われていない。帰属の否定は 10 本（0.053191）しかなく、四つの形のうち最も少ない——最も働いている形が、最も使われていない。

観察 4.3

分離子は、装置が判定になっているか、言い直しになっているかである。題名に無い語を一つも使っていないなら、その分離子は判定として働いていない疑いがある——機械で拾えるのはそこまでで、実際に働いているかは読んで決めるしかない。

観察 4.4

以後の規約。分離子には、題名に無い語を少なくとも一つ入れる。入れられないときは「どちら側に無いか」を名指す——既刊は直さない。これは以後の書き方についての規約である。

観察 4.5

言わないこと。英語版は数えておらず、取り出せたのは決まった型の 188 本だけで、544 編の一部である——残りは別の言い回しで書かれており、そちらの言い直し率は測っていない。

5. 点呼と結び

1. 544 編（0.779370）が持つ（計算 2.1）：最初は論文23。

2. **1〜100** で **0.050505**（計算 2.1）：まだ無い。
3. **201〜300** で **0.990000**（計算 2.1）：ここで定着した。
4. **301** 以降は四帯とも **1.000000**（計算 2.1）：作法になった。
5. **188** 本すべて相異なる（計算 2.3）：ただし驚くに当たらない。
6. 帰属の否定は **10** 本（**0.053191**）（観察 2.5）：最も少ない形。
7. 題名との重なりの平均 **0.283871**（計算 3.1）：尺度。
8. 重なり **1.0** が **32** 編（**0.206452**）（計算 3.1）：本稿の芯。
9. 読むと **28** 編（**0.875000**）が言い直し（計算 3.3）：足しているのは **4** 編。
10. 判定か、言い直しか（観察 4.3）：**分離子・論文600・論文300**。

結び：体系が最も繰り返した装置は、五本に一本は働いていない。論文**699** までの **698** 編のうち **544** 編（**0.779370**）が分離子を持ち、**201〜300** の帯で **0.410000** から **0.990000** へ跳び、**301** 以降は四つの帯すべてで **1.000000** になった——装置が作法になった時点は、はっきり特定できる。取り出せた **188** 本の文はすべて相異なるが、主題が違えば語も違うので、それは装置が働いている証拠にならない。分離子の語のうち題名にも在る割合は平均 **0.283871** で、**32** 編（**0.206452**）は題名に在る語だけでできている——その **32** 編をすべて読むと、**28** 編（**0.875000**）は題名の主張に「かどうか」を付けただけだった。足していた **4** 編のうち **3** 編は「どちら側に無いか」を名指しており、その形は体系で **10** 本（**0.053191**）しか使われていない——最も働いている形が、最も使われていない。分離子は、装置が判定になっているか、言い直しになっているかである。以後の規約——分離子には題名に無い語を少なくとも一つ入れ、入れられないときは「どちら側に無いか」を名指す。既刊は直さない。既刊との位置——論文**300** は判定できると書き、論文**600** は判定語が判定になっていないことを数えた。ここでは装置が情報を足していないことを数えた。正直に言えば——英語版は数えておらず、**188** 本は **544** 編の一部で、残りの言い直し率は測っていない。

参考文献

1. 山岸勇輝 (2026).『三百本目の点呼 ── 同根か別根かは、判定できる』[論文300]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22171914
2. 山岸勇輝 (2026).『第六百回の点呼 ── 三百本目の警告は当たったが、恐れていた形では来なかった』[論文600]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22805283

— From thinking to syncing. —

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

© 2026 Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan · Licensed under Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0)